慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	巻頭言
Sub Title	
Author	内藤, 泰宏(Naito, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2015
Jtitle	Keio SFC journal Vol.15, No.1 (2015.) ,p.6- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 世界を救え : SFCバイオの挑戦
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1501--004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集　世界を救え ～ SFC バイオの挑戦

巻頭言

KEIO SFC JOURNAL Vol.15 No.1 特集編集委員

内藤 泰宏
慶應義塾大学環境情報学部准教授

SFC バイオに伝統はない。開設当時の SFC に生命科学の気配はなかった。SFC に生命科学を芽吹かせたのは、冨田勝と彼の志に共鳴した向こうみずな学生たちだ。SFC 創設当時、情報科学者として世界のトップランナーのひとりだった冨田は、初代環境情報学部長・相磯秀夫に談判し、生命科学に転向する。現在では生命科学にとって当然かつ不可欠の要素になった生命情報科学（バイオインフォマティクス）という言葉の響きが、実験生物学者に奇異な響きしか与えなかった時代に、情報科学と生命科学の融合を試み、やがて起こった世界的な革新の一翼を担った。一教員の強い志で、まったく新しい学術領域が立ち上がり、やがて塾内外へと広がっていく。SFC では 25 年の間に何度も起こったエポックだが、こんなことが頻繁に起こるキャンパスは滅多にないだろう。

2001 年、山形県鶴岡市に開設された鶴岡タウンキャンパスに先端生命科学研究所が設置され、SFC 発の生命科学はさらに勢いづき、多様化した。遺伝情報の解析にはじまり、細胞シミュレーション、代謝物質を網羅的かつ一斉に測定・解析するメタボローム解析技術などが次々と花開き、画期的な学術的成果を生みだすとともに、数多くの人材を多方面に輩出した。卒業生には、高橋恒一（理研・生命システム研究センター）、谷内江望（東大・先端研）のように、すでに PI として研究室を主宰する科学者もいる。また、関山和秀らが創業したスパイバー社の活躍については、改めてここに紙数を割くまでもない。

本特集は、これからも止まることなく変転しつづける SFC バイオの現時点でのスナップショットである。SFC および TTCK で研究を推進する冨田、ワンピン・アウ、秋山美紀、荒川和晴、板谷光泰、伊藤卓朗、岩宮貴紘、金井昭夫、黒田裕樹、佐野ひとみ、杉本昌弘、クマール･セルバラジュ、曽我朋義、柘植謙爾、内藤泰宏、仲田崇志、中東憲治、平山明由、堀川大樹、福田真嗣、

ダグラス・マレー、若山正隆、渡辺賢治、渡辺光博、武林亨（医学部、SFC兼担）に加え、国内外の研究期間で活躍する卒業生から斎藤輪太郎（UCSD）、篠田裕美（文部科学省）、菅原潤一（スパイバー社）、高橋恒一、戸谷吉博（阪大）、藤島皓介（NASA）、SFCバイオからスピンアウトしたベンチャー・HMT社から大橋由明を招待論文の著者に迎えた。一部論文には、現在SFCに在籍する学部生も共著者として名を連ねている。

寄せられた論文は、いずれも編集委員の期待以上の未来志向の熱気あふれるものばかりである。また、図らずも、複数の執筆者がSFCで過ごした日々に言及しており、それぞれにとってSFCでの経験が原点となり、現在そして未来へと連なっていることを実感させられた。トップダウンのテーマを設けず、科学者たちがそれぞれの関心に従って自由に研究するのが、SFCバイオの一貫した特徴のひとつである。本特集にもその自由さ、多様性の一端が顕れていると思う。

特集のタイトル「世界を救え」には些かの誇張もない。私たち人間は生命の一員であり、私たちが日々口にする食べ物のほぼすべても生命に由来する。私たちが呼吸する酸素も、私たちの文明を支える化石燃料も、生命なくしては存在しえなかった。現在の地球は、生命が生存可能な特別な惑星というよりは、生命が存在してきたことによって極端に特殊化した惑星である。一方で、生命は、もっとも理解が進んでいない自然科学の対象のひとつであり、生命科学はもっとも幼く未成熟な科学のひとつである。生命科学には、未解明の原理、未解決の問題が山積している。生命を理解する取り組みは、地球環境を理解し、私たちがよりよく生きるための科学的な道筋を見いだすことに直結する。SFCバイオの多彩な挑戦は、さまざまな局面で、さまざまな角度から世界を救う試みである。

末筆ながら、研究倫理に関する招待論文を１報掲載する。昨今、自然科学ことに生命科学の分野で、科学者の倫理観を問われる大小の事件が相次ぎ、耳目を集めている。本誌で生命科学の特集を編む機会を捉え、我が国の自然科学コミュニティの抱える問題に関するオピニオンリーダーのひとりである榎木英介氏より、この問題を簡明に解きほぐした貴重な原稿をお寄せいただいた。（敬称略）